

# 住民による秋田市の地区別地域イメージの内部格差とその要因

佐々木 秀 一

キーワード：地域イメージ 居住選好 クラスタ分析 デンドログラム

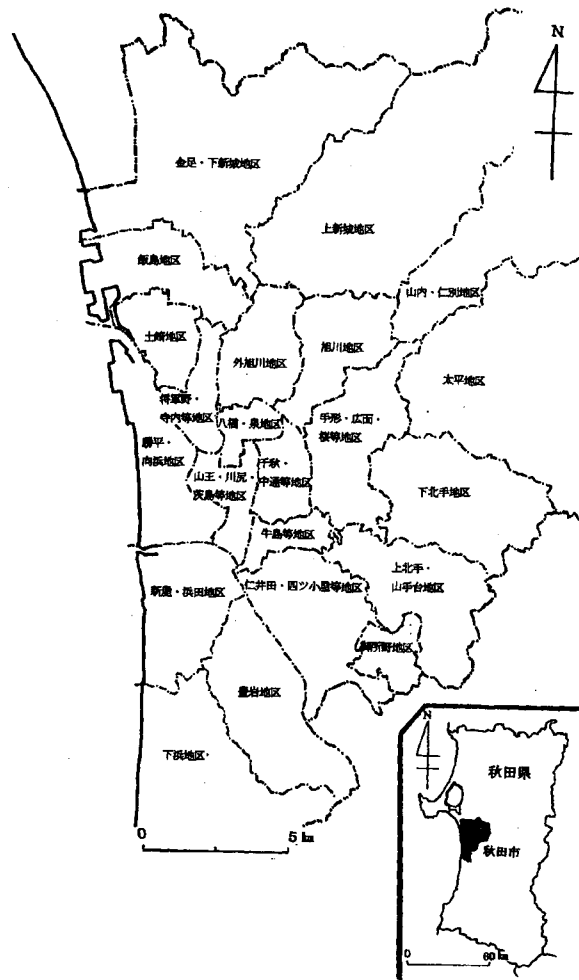
## I 序論

本研究は秋田市に住む人々が市内の各地区にどのようなイメージを持っているのか、それがいかなる要因によるものなのかを明らかにすることを目的とする。また、その要因が地域評価にどのような影響を与えているかを探っていく。そこで、手形山県営住宅の住民と大学生へのアンケート調査結果を比較し、イメージの格差も考察する。アンケート項目については伊藤（1994）、尾藤（1995）を参考にした。

本研究は、秋田市都市開発部都市計画課が発行している『第5次秋田市総合都市計画』を参考に、秋田市の市域を22の地区に分割し、アンケート調査の単位地区とした（第1図）。単位地区の設定手順は、中央、東部、西部、南部、北部の各地域を中学校区程度の規模に分割した。この単位地区以上に細かく分けると、本研究の目的である地域イメージが把握しにくくなり、アンケート対象者の回答負担が大きくなることも考慮した。

## II 調査対象者の属性

アンケート対象者である手形山県営住宅の住民の回答者は、全体的に40歳代が多く、小・中学生の子供がいる世帯員がほとんどだった。そしてほとんどの世帯員は市内に長く住んでいる。通勤・通学手段については、自家用車やバイクといった個人的で、行動範囲も広い交通手段を持っている人が多いことから、市内の多くの地区について回答者がよく知っているのではないかと推測される。大学生の回答者は、様々な地区の出身者が多く、また市外・県外からの出身者も多いことから、住民調査とはまた違ったイメージの格差が見られると予想できる。大学1年生の回答者が多く、秋田市に居住して間もない場合が多い。つまり秋田市22地区の初期的イメージが保たれている可能性が高く、住民調査との違いを比



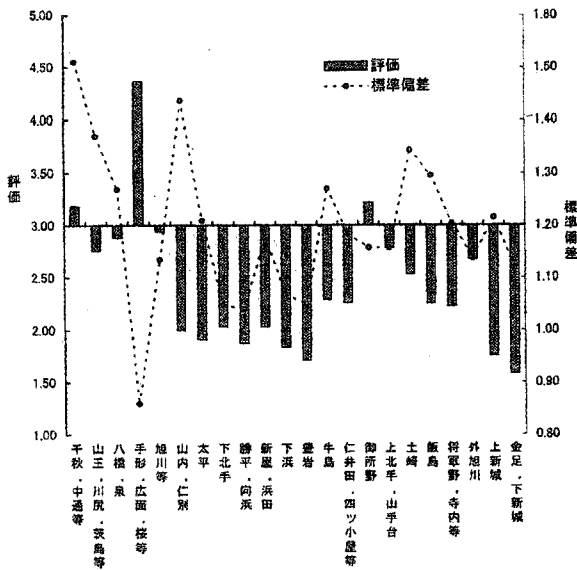
第1図 研究対象地域

（秋田市都市開発部都市計画課『第5次秋田市総合都市計画—都市計画マスタープラン』（2001）より作成）

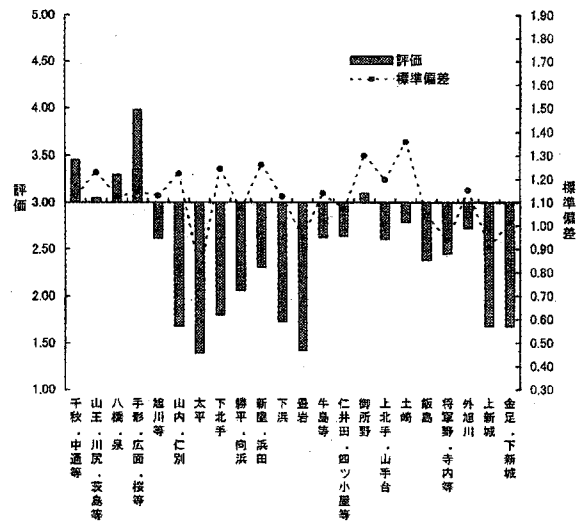
べるのは有意義であると思われる。

## III 居住選好イメージ

ここでは、居住選好評価の高い地区を地域評価の高い地区として定義する<sup>1)</sup>。例えば評価値3.00以上の地区は相対的に地域評価が高い地区であり、これ



第2図 県営住宅住民による居住選好の地区別評価  
(2002年9月)  
(アンケート調査により作成)



第3図 大学生による居住選好の地区別評価  
(2002年10月)  
(アンケート調査により作成)

以下となる地区は逆に地域評価が低いということになる。地域評価の高い地区には、住民調査、大学生調査ともに手形・広面・桜等地区が特に高い値で選択された。特に住民調査では、その値が他の地区の評価と比べて大きい(第2図)。つまり、現在住んでいるこの地区に対して強いプラスのイメージを持っており、その強いイメージが他の地区の評価を下げていると考えられる。標準偏差も低いことから、アンケート対象者間の評価格差はそれほどない。

大学生の評価は、中央地域で少し高い(第3図)。住民調査では平均的に評価が低いのにに対し、大学生調査では主に山間部の地区で評価が低いほかは、ほぼ0~2.00の間にとどまっている。標準偏差を住民調査と比べると、それほど地区間のイメージのばらつきがなく、統一したイメージを持っている。しかし「わからない」という回答が住民調査よりも多かった。「わからない」と回答した大学生は主に県外や市外出身で、市内に住んでから6ヶ月という人に多く見られた。一方、出生時から市内に住んでいる大学生には「わからない」という回答はなかった。

#### IV イメージ形成の要因

##### 1. 秋田市のイメージプロフィール

地域イメージに影響を与えている要因の1つとし

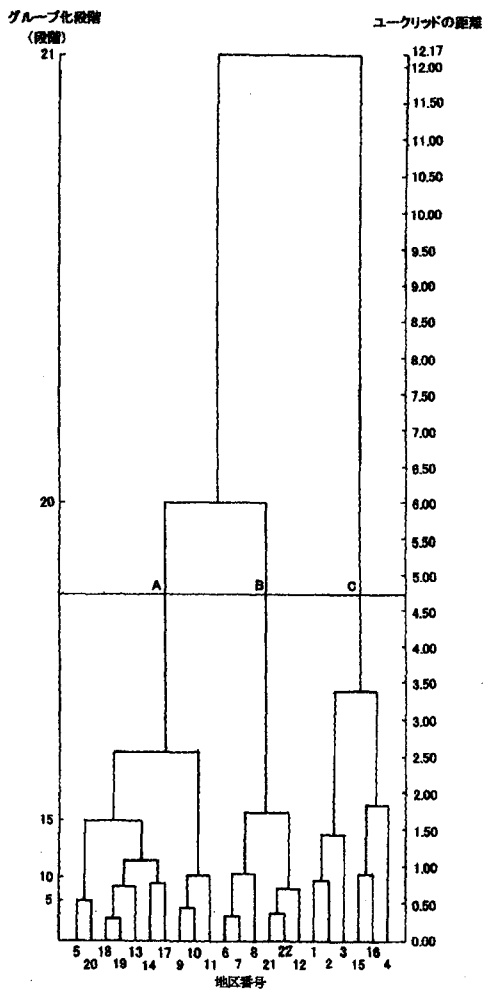


写真 イオン秋田ショッピングセンター  
県内有数の大型ショッピングセンター。建物正面側には御所野ニュータウンが広がっている。  
(2003年1月15日、駐車場において筆者撮影)

て、前述までの居住選好とは別に各地区の印象を形容詞、形容動詞を用いた5指標によるイメージプロフィールによって分析した。住民、大学生調査ともに調査結果が類似したため、まとめて分析していく。

「明るいー暗い」では、市の中心地である中央地域、大型ショッピングセンターのあるイオン秋田ショッピングセンターや新興住宅が広がっている南部地域、手形・広面・桜等地区で「明るい」と思われ、山沿いの地区で「暗い」と思われている。

「新しいー古い」では、主にニュータウンや、新しくできたショッピングセンターなど、新しさをイメージさせるものが多く連想された地区で「新しい」



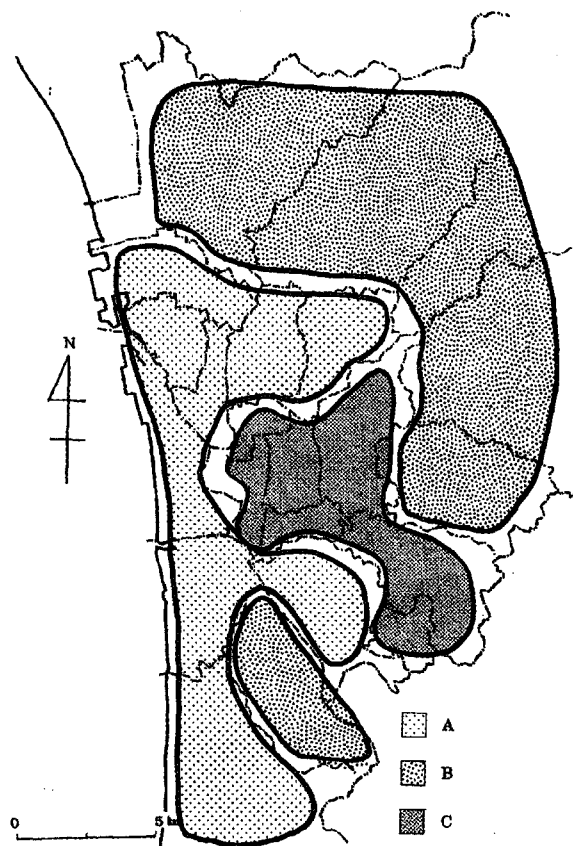
第4図 県営住宅住民の5段階評価による22地区のグループ化デンドログラム (2002年9月)  
(アンケート調査により作成)

注) 地区番号

1. 千秋・中通等 2. 山王・中通・茨島等 3. 八橋・泉
4. 手形・広面・桜等 5. 旭川等 6. 山内・仁別 7. 太平
8. 下北手 9. 勝平・向浜 10. 新屋・浜田 11. 下浜
12. 豊岩 13. 牛島等 14. 仁井田・四ツ小屋等 15. 御所野
16. 上北手・山手台 17. 土崎 18. 飯島 19. 将軍野・寺内等
20. 外旭川 21. 上新城 22. 金足・下新城

と思われる。逆に「古い」と思われている地区は山沿いの地区で高くなっているが、城下町として発展し、その景観を現在でも残している土崎地区で「古い」と認識されている。

「静か一騒がしい」では、中央地域以外はほとんどの地区で「静か」と思われているが、国道が通っていない地区ではその割合は高いものの、国道の通っている地区では「静か」というイメージは弱まるものと推測できる。



第5図 クラスタ分析による秋田市のイメージプロフィール (2002年9月・10月)  
(県営住宅の住民と大学生によるアンケート調査より作成)

「便利な一不便な」では、交通機関が発達している市中心部で「便利な」と思われている。「不便な」と思われているのは、山沿い、海沿いに位置している地区でその割合が高くなった。

「都会的な一庶民的な」では、官庁街のある中央地域の一部と高級住宅地である御所野地区でその割合は高くなっているものの、ほとんどの地区で「庶民的な」と思われている。

そしてこの5指標を用いてクラスタ分析<sup>2)</sup>をした結果、22地区を3グループに分けることができた(第4図)。1つは主に海沿いに位置している地区と、中央地域の周りに位置している地区。2つ目は、主に山沿いの地区。3つ目は、中央地域、手形・広面・桜等地区、南部地域の一部である(第5図)。

## 2. 「遊び場所」選好イメージ

地域のイメージを形成する別要因としては、「遊び場所」選好があげられる。アンケート対象者が

「遊び場所」を選ぶことによって、その地区を訪れる機会を得て、その地区のイメージを容易に形成できると考えたからである。そこで、「どこに良く遊ぶに行くか」を上位3位までを回答していただいた。

遊び場所選好では住民調査と大学生調査に明確な違いが見られた。住民調査ではどこに遊びに行くかということに関しては個人差が見られたが、30歳未満、30代では子どもと遊びに行くといったような回答が見られ、その地区のイメージを形成するのに子どもの影響があると考えられる。また、50歳以上になると「図書館」や「展示会」がある文化会館等を訪れる機会が多く、他の世代とは違ったイメージの形成があるのではと考えられる。これに対して、年齢層が20歳前後に固まった大学生は、選好場所に統一感が見られる。すなわち、その選好場所は「秋田駅前」「フォーラス」「イオン」の3つに大別できた。「フォーラス」とは秋田駅前にあるデパートで、特に学生はこのデパートを利用する機会が多いため、「秋田駅前」と回答している人の中にも「フォーラス」の影響は大きいのではないかと推測できる。2番目に多く遊びに行くところとして「イオン」（御所野地区）という回答が多く、買い物のしやすさ、店の種類といったものが「遊び場所」選好のイメージに影響を与えているといえる。

## V 結論

県営住宅の住民と大学生という居留意識の違う回答者によって、秋田市22地区に抱いている地域イメージを分析した結果、5段階評価によるイメージプロフィールでは県営住宅の住民と大学生は同じイメージを持っていた。つまり、住む意識が違うとはいえ、細部に差異は見られるが秋田市各地区に対して同じ

ようなイメージを持っている。しかし、「遊び場所」選好でも明らかになったように、その地域イメージに影響する要因は居留意識により異なるらしいということが明らかになった。

本研究は手形山県営住宅の住民と大学生をアンケート対象者として、イメージの内部格差の一端を明らかにしようとしてきた。しかし、回答者の属性が変われば、秋田市の各地区に抱いているイメージは変化するものと思われる。例えば手形・広面・桜等地区以外に住んでいる人を対象者にした場合や、複数の地区で行った調査結果を比べた場合、イメージの内部格差はさらに深くなると予想できる。

アンケート調査では手形山県営住宅の住民の皆様、秋田大学生の皆様にご多大なご協力を賜った。本稿の作成にあたっては、秋田大学教育文化学部の篠原秀一先生には終始ご助言、ご指導をいただいた。末筆ながら以上の方々へ深く感謝申し上げます。

## 注

- 1) 尾藤（1995）は、甲府市の地域イメージを明らかにするために居住選好を地域評価として定義した。本研究はその定義を参考にした。
- 2) 本稿におけるクラスター分析は、基準化されたユークリッド距離によるウォード法で行った。

## 文 献

- 伊藤 悟（1994）：北陸地方における都市のイメージとその地域的背景，人文地理，第46巻，353-371。  
尾藤章雄（1995）：『都市の地域イメージ』大明堂，154ページ。